

陳景元の音注

——『南華眞經章句音義』と『上清大洞眞經玉訣音義』について——

浦山あゆみ

はじめに	三
第一章 『南華音義』に用いられたテキスト	五
第二章 引用文献について	九
第三章 音注の分類	一六
第四章 反切の比較検討	二六
第一節 A 用字が『廣韻』『集韻』と全同の例	三〇
第二節 B 用字が『廣韻』とのみ一致する例	三二
第三節 C 用字が『集韻』とのみ一致する例	三三
第四節 H 用字は異なるが『集韻』と同音の文字を用いる例	三五
第五節 I 折衷例	三六
第六節 L いずれにもあてはまらない例	三七
第七節 小結	四一
第五章 『上清音義』について	四二
むすび	四五

## はじめに

薛致玄、『道德眞經藏室纂微開題科文疏』卷之一によれば、北宋の陳景元の字は太初、玄號は碧虛子、建昌の人という<sup>(1)</sup>。生年は明記されないが、慶曆二年（一〇四二）に高郵天慶觀の韓知止に師事し、翌三年（一〇四三）道士となり、年十八で笈を負って名山に遊び、高士張夢得より老莊の微旨を學んだのち、最後は紹聖元年（一〇九四）六月十三日享年七十で化した。

若い頃より學問熱心であったようで、たとえば、『碧虛子親傳直指』<sup>(2)</sup>の冒頭では、

僕自幼學道、弱冠棄家、遍歷江湖、求參道德、誦祖師張紫陽以來諸先生丹經・詞曲・傳記、熟研精思、尋文求義。

といい、また、陳景元が殷敬順撰『列子冲虚至德眞經釋文』<sup>(3)</sup>に寄せた序文（熙寧二年（一〇六九）題序）で、

僕自總角好讀是書、患無音義解處闡惑。

と述べていることから、それがうかがえよう。ちょうどこの序文を記した頃あたりから、その名が廣く知れ渡るようになったらしく、上宮觀より道德經・南華經の講義を請われるまでになり、さらには神宗（在位一〇六七～一〇八五）より眞靖大師の稱號を賜っている。熙寧五年（一〇七二）には『道德經』に自らほどこした注釋を皇帝に進上し、これがまた高く評價され、それゆえ翌六年（一〇七三）に東京に完成したばかりの中太一宮の宮主に任ぜられた<sup>(5)</sup>。この中太一宮で陳景元は『寶文統錄』を目録し、そこに收められた『莊子』の數種類の版本の對校作業を

行う。これを基に撰したのが、『南華眞經章句音義』(元豊七年(一〇八四)敍。以下『南華音義』<sup>(6)</sup>)である。この作業については、『南華音義』敍文に簡略ではあるが以下のごとく記されている。

復將中太一宮寶文統録内有莊子數本及笈中手鈔、諸家同異、校得國子監景德四年印本、不同共三百四十九字、仍按處出、別疏闕誤一卷、以辯疑謬。

おそらく『南華音義』の撰述をあらかた終えたからであろう、この敍文を記す前年、すなわち元豊六年(一〇八三)に陳景元は茅山へ歸り、今度は三洞經の校正に着手している。<sup>(7)</sup> その結果、著されたのが『上清大洞眞經玉訣音義』(以下、『上清音義』<sup>(8)</sup>)であろうと思われる。この書には明確な年號等が示されないため、成立年は正確には分からないが、『上清音義』自敍に、

景元總角出家、弱冠訪道、遊歷僅三十載、綱領十有餘年、老歸茅山、結菴懺悔、自歎道緣蹇薄、塵業深重。雖孜孜教典、而未遇眞師、欲誦洞經、詎敢開韞。

とあることから、この書が茅山へ歸ったのちの晩年に著されたものであることが看取されよう。つまりこの自敍から、『南華音義』を撰し終えた後まもなくまた『上清音義』の著述を開始したと思われる。したがって、本稿では『上清音義』は、『南華音義』よりも後に成立した書であると考ええる。

さて、本稿でこれから取り上げるのは、その陳景元の『南華音義』と『上清音義』の音注である。すでに前稿で觸れたことであるが、これら二書には數多くの反切が示されている。周知のごとく、反切用字は新しい書物が編纂されるたびに刷新されることよりも、むしろその書物以前に成立している既存の別の書物から引用したり、もしくは一部をそのまま引用し、また一部は何らかの基準に則って用字に更改を加えて付す場合が少なくない。

『南華音義』もそうした例に違わず、陸徳明『莊子音義』の反切を少なからず引用している。そこで前稿では、まずは兩者すなわち『南華音義』と『莊子音義』とで合致しない反切等が見られることを指摘し、その異同を一覽表にまとめた。紙幅の関係により前稿は兩者の音注の異同を示すのみにとどまったが、本稿ではさらに深く掘り下げ、陳景元がどのような先行書の注釋を参照して『南華音義』と『上清音義』の兩書の「音義」を完成させたと考えられるのか、そして、それら既存の書物に見える音注と陳氏の兩書の音注を檢討し、そこにはどのような特色があると考えられるのかなど、陳景元の音注にかんする考察を試みたいと思う。

『上清音義』の方はすでに汪業全の「『上清大洞眞經玉訣音義』音注考」(以下、汪二〇〇四a)という詳しい論考が出ているため、最後に『南華音義』との比較上必要と思われることがらについて觸れることとし、まずは先に成立したとおぼしい『南華音義』の方から見ていきたい。

### 第一章 『南華音義』に用いられたテキスト

右ですでに陳景元が中太一宮で『莊子』の數種の版本を對校した旨を述べたが、本章において、まずは陳氏が『南華音義』を編むにあたり、いったい『莊子』のどのようなテキストを使用して音義をほどこしたのかについて見ていきたい。陳氏が用いたテキストの具體名は、『南華音義』の付録的書物である『南華眞經章句餘事』に掲げられているので、以下それを列挙すれば、

- ① 景德四年(一〇〇七) 國子監本
- ② 江南古藏本 徐鉉・葛湍校

- ③ 天臺山方瀛宮藏本 徐靈府校
- ④ 成玄英<sup>(10)</sup>解疏 中太一宮本 張君房校
- ⑤ 文如海正義 中太一宮本 張君房校
- ⑥ 郭象注 中太一宮本 張君房校
- ⑦ 散人劉得一注
- ⑧ 江南李氏書庫本
- ⑨ 張潛夫補注
- の九種である。

①は前稿で少し觸れたのだが、景德二年(一〇〇五)二月に國子監直講の孫奭が上奏し、詔により許され刻板した『莊子音義』<sup>(11)</sup>のことであろうと思われる。②の徐鉉は『說文解字』の研究で著名であるが、それ以外にも北宋の太宗に命じられて道教經典を校訂し、三千七百三十七卷にまとめあげたことでもその名が知られる。<sup>(12)</sup>③徐靈府とは、唐代の道士で、『通玄眞經注』などの著作が知られ、自ら黙希子と號し、天臺山に隱居して廬を結び「方瀛」と名付けてそこで修練した人物である。<sup>(13)</sup>④成玄(元)英も唐の道士で、唐太宗より「西華法師」の號を賜ったとされる。<sup>(14)</sup>著作の『南華眞經注疏』が『正統道藏』に收められている。④の成玄英『莊子疏』十卷は、『宋史』藝文志で確認でき、④以外にも⑤の文如海『莊子正義』十卷、⑥の郭象注『莊子』十卷、⑨の張昭『莊子補注』十卷の存在が確認できる。⑤の文如海は未詳。ちなみに④〜⑥に共通する張君房は北宋の著名な道士で生卒年は不明であるが、景德年間(一〇〇四〜一〇〇七)の進士で、大中祥符年間(一〇〇八〜一〇一六)に寧海へ謫遷され、『大宋

天宮寶藏」(天禧三年(一一〇一)完成)の編纂に深くたずさわった人物である。したがって、⑤の文如海はおそらく、張君房よりも前の世代の人であり、どれほど下ったところで張君房より後の時期の人物とは考えにくいであろう。⑦の劉得一については、陳氏自身がつけた注に「大中祥符時人」とあることから十一世紀初頭に在世した人と分かるのみである。<sup>(16)</sup>⑨の潜夫は張昭の字で、彼の傳は『宋史』卷二六三に見え、それによると開寶五年(九七二)に七十九歳で卒したという。

さて、『南華音義』においてはこれらのテキストのことを簡稱ないしは別稱で表している。すなわち、②は江南藏本・江南古藏本、③は天臺山方瀛觀古藏本、④は成本・成元(玄)英本、⑤文本・文如海本、⑥張本・張君房本、⑦劉得一、⑧李氏本・江南李氏本、⑨張潜夫本などである。②は基本的に江南古藏本、⑧の方は江南李氏本と記されるが、『南華音義』には時に江南本という呼稱も使われており、これが②⑧のいずれを指すのかは不明である。

以上が『南華真經章句餘事』に見られる陳景元の用いたテキストであるが、實は、上記のいずれを指すのか、あるいはこれら以外のテキストを使用したのか分からない、不明のものが『南華音義』の中に三種見られる。

まず一つは、「今本」という呼稱が、『南華音義』卷之二「内篇齊物論二」の末尾「齊化」に出現する。「遽遽」に對する注の一部であるが、注の文章として『莊子音義』の注(崔本作據據、引大宗師云據然覺)をほぼそのまま引用し、その下に陳氏自身が付加したであろう注として「今本亦作遽」という。この「今本」が具體的に上のどのテキストを指すのかは特定しがたい。①のみ簡稱ないしは別稱が見あたらないため、「今本」が①を指す可能性も否定できないが、逆にそうであると斷定できる證據もなく、未詳のまま残しておかざるを得ない。

次に、卷之四「内篇應帝王七」の「聖人无常心」の「无其文」の注に「向秀本作无、江南古藏本作玩、又作既。玩・既並非是」という表記が見られる。『莊子音義』には向秀の注が多數引用されており、『南華音義』にも『莊子音義』からいわば孫引きしたとおぼしい向秀の引用文が多數見られるが、當該部分は『莊子音義』の天理大學圖書館所藏（以下、天本という）・北京圖書館所藏（以下、北本）とも「李云既盡也」とするのみで、上記「向秀本作无」という文はなく、また『經典釋文彙校』も特に何も記さない。したがっておそらく陳氏が残した注記と考えられるが、はたして陳氏が直接、向秀の『莊子音』を参照したのか、あるいは何か別のテキストに引く「向秀本」を引用したのかは分からない。ちなみに『宋史』藝文志は向秀『莊子音』を載せない。

このほか、卷之五「外篇駢拇八」の最初「養正性命」に見える「而多方於聰明之用也」の下注に「舊本云而多方於聰明之用也」とあるが、この「舊本」も具體的に何であるのかは定かではない。なお「舊本」という呼稱はここ以外にも數箇處見られる。

これら不明のものは、あるいは陳氏が實際には九種以外のテキストを見たのだが、何らかの理由で記さなかったのかもしれないし、あるいは九種のテキストのいずれかから孫引きしたものかもしれない。また、上記不明の三種のうち「今本」「舊本」については九種のテキストのうちのいずれかを指す呼稱かもしれない。もしかするとそのいずれれもが混在している可能性さえあろう。明確な答えはただちには得難いが、本稿ではおそらく孫引きであろうと捉えておきたい。なぜなら『南華音義』全體を見渡したとき、その注には『莊子音義』から引用したとおぼしい文章がかなりの割合で見られることがその證左の一つである。たとえば際だった一例を挙げると、『南華音義』卷之六「雜篇讓王十五」の末尾の注などは八行以上にわたる長い文であるが、その内容は一字違わず『莊



『子音義』の釋文そのままである。<sup>(17)</sup>このように『南華音義』の注は、既存の書物の注から引用した可能性が高いと考えられるからである。

實はこれは本稿にとって大變重要なことである。前稿において陳景元が『南華音義』中にどこした音注のうち『莊子音義』とは異なるものを列舉したが、それら異なる音注も『莊子音義』以外の書物からの孫引きである可能性を示唆するからである。この點をもう少し明らかにするために、今度には掘り下げて、今度は陳景元の注に引用される書物から問題點を考察してみたいと思う。

## 第二章 引用文獻について

『南華音義』の注に見られる書物は多種多様にわたる。なかには書名と捉えてよいのか俄には判断しかねるものもあるため、<sup>(18)</sup>精確な数は示せないが、重複を避けて大まかに数えただけでも四十五種以上にのぼる。ただし、これらすべてを陳氏が目録して自身の注釋文に反映させたかどうかは不明である。一瞥した限りでは『莊子音義』<sup>(19)</sup>の注からの引用文は相當數見られるが、もちろん、それらの中には單純な孫引きとはいえない文章もあり、『莊子音義』に基づき陳氏自身が實際に當該書物を繙いて引用しなおしたと見受けられる例も散見される。たとえば、『南華音義』卷之二「内篇養生主三」の「得生理」中の「桑林」に對する注で、

桑林 司馬云湯樂名、崔云宋舞樂名。左傳襄十年、宋公享晉侯於楚丘、請以桑林。注、桑林湯天子之樂名。とあるが、これは『莊子音義』の注「桑林 司馬云湯樂名、崔云宋舞樂名。案即左傳、舞師題以旌夏、是也」をもとに、陳景元が『左傳』の文章を再確認した結果、あらためてほどこされた注と考えられる。

確かにこうした例は散見されるものの、全體を通してみればやはり『莊子音義』の影響はきわめて大きく、數々の引用書の多くが『莊子音義』に見られるものであるといつてよいであろう。このことをふまえ、本節では『南華音義』の義注に現れる『莊子音義』所引でない書(つまりいいかえれば、『莊子音義』からの單純な孫引きではない、『南華音義』の引用文に見える書)を拾い上げて、少し見てみたいと思う。

『莊子音義』の釋文に依據せずに、『南華音義』に採用されたと考えられる注釋に出現する書名を順に列擧すると、以下のようになる。<sup>(20)</sup>

『禮記』・『玉篇』・『說文』・『陸機』・『要覽』・『史記』・『高士傳』・『風俗通』・『淮南子』・『詩經』・『字林』・『天尊降臨記』・『陳藏器』・『本草拾遺』・『王子年拾遺記』・『廣聖義』・『漢書』・『太平經』・『集韻』・『搜神記』・『寶玄眞經』・『呂氏春秋』・『方言』・『孝經』・『吳越春秋』・『論語』・『李淳風』・『天元主物簿』・『何晏注』・『亢倉子』・『群經音辯』・『爾雅』・『史崇』・『藏音義』・『桓譚』・『新論』・『白虎通』・『尚書』・『周易』・『荀子』

以上の書物は、『南華音義』の義注に出現し、且つ、それに對應する『莊子音義』當該箇處の釋文には見られないものであるが、これらの中には、『南華音義』所引の『莊子音義』の他の釋文部分に出現する書名も含まれているため、これを見ただけでは全く何もわからない。しかし、これらを個別に觀察してみると面白いことが見えてくる。本稿の論點は音注に重きを置くので、義注すべてを詳細に見ていくことは避け特徴的な注釋文のみに絞って、『南華音義』の注に見える引用書(但し『莊子音義』からの孫引きを除く)をめぐる問題を考察していくこととする。

『南華音義』において、『莊子音義』に見られない注に『禮記』が二例引用されている。特に次の一文は興味深

い。

①卷之一 内篇逍遙游一 順化逍遙「今培」薄回切。益也。禮記曰墳墓不培、培猶治也。

(參照)『大廣益會玉篇』卷第二 土部「培」薄回切。益也。禮記曰墳墓不培、培猶治也。又音部。方言云冢或之培。

類似性から判断するに、『大廣益會玉篇』からの孫引きの可能性がきわめて高いことが分かる。

—では『玉篇』の引用例はどうであろうか。

②卷之一 内篇逍遙游一 極變逍遙「而」玉篇音能、奴登切。說文熊屬足似鹿、能獸堅中、故侑賢能也。或如字。而、安也。易宜建侯而不寧。鄭氏讀。今不取。

この注に基づき『大廣益會玉篇』を繙くも、當該の注(特に「音能」)は見えない。

『大廣益會玉篇』卷第二十六 而部「而」人之切。語助也。乃也。能也。又頰之毛曰而、今作髻。

『大廣益會玉篇』卷第二十三 能部「能」奴登切。多技藝也、工也、善也。又奴臺切。三足鼈也。

試みに『集韻』を引いてみると、やはり「音能」という注はみられないものの、『南華音義』の義注と明らかに関連性の高い記述が看取される。

『集韻』平聲十七登 「能」奴登切。說文熊屬足似鹿、能獸堅中、故侑賢能、而彊壯稱賢傑也。(下略)……

『集韻』平聲十七登 「而」安也。易宜建侯而不寧。鄭氏讀。

ちなみに『廣韻』では以下のごとくであり、『大廣益會玉篇』よりはやや近い表現であるが、『集韻』ほどの類似性は見られない。

『廣韻』平聲十七登。「能」工善也。又獸名。熊屬足似鹿、亦賢能也。奴登切、又奴代奴來二切。

また『篇韻』と記す例は一例、

③卷之九 雜篇達生二十三 趣異「豢」音患、養也。見張君房本。舊作豢、篇韻不收。恐轉寫誤。(下略)……であり、當然のことながら『大廣益會玉篇』『廣韻』に「豢」字は收められず、また異體字を多く示す『集韻』にも見あたらない。一方、「豢」字はいずれにも收められる。

『廣韻』去聲三十諫「豢」穀養畜、又牛馬曰豢、犬豕曰豢。

『大廣益會玉篇』卷第二十三 豕部「豢」乎申切。養豕也。

参考までに『集韻』を見ると、『莊子』の該當箇處を引用する。

『集韻』上聲二十四緩「豢」胡滿切、養也。莊子民食芻豢。

こちらはごく短い注であるので、俄には判断しかねるが、どうやら『集韻』の注の影響が濃いような印象をおぼえる。このおぼろげな印象は、次の『説文』の引用例を詳しく見れば、より明確化される。

『南華音義』所引の『説文』の例は多い。その多くがやはり短い文が多いので、判断がむずかしいが、比較的長文の引用例を中心に見てみると、

④卷之七 雜篇盜跖十六 行義「多信」伸信同音。説文屈伸也。經典信通作伸、下同。以義理求之。

(参照)『集韻』平聲十七眞「伸信」説文屈伸也。經典信通作申。

⑤卷之八 雜篇在有十七 化機「得水則爲繼」音繼、司馬本作繼、云萬物雖有兆朕、得水土之氣、乃相繼而生也。説文繼續也。一曰反繼爲絶。今本作繼、是反繼也。

〔參照〕『集韻』去聲十二霽「繼」吉詣切。說文續也。一曰反繼爲繼。俗作繼、非是。

⑥卷之九 雜篇山木二十四 失照「忘其身」說文身身躬也。象人之身。爾雅云我。

〔參照〕『集韻』平聲十七眞「身」舛人切。說文躬也。象人之身。爾雅我也。

⑦卷之十一 雜篇庚桑楚二十七 去智「朱愚」鍾輸切。說文朱赤心木松柏屬也。一曰丹也。朱愚義取丹心愚  
春也。（下略）

〔參照〕『集韻』平聲十虞「朱」鍾輸切。說文朱赤心木松柏屬、一曰丹也。亦姓。

⑧卷之十一 雜篇庚桑楚二十七 自定「券內」音勸，券契也。……（中略）……說文券契也。券別書之書以刀判契其旁，故曰契也。券郭忠恕佩觿券、從刀、或從力者勞券之  
券、一曰止也。

〔參照〕『集韻』去聲二十五願「券」區願切。說文契也。券別書之書以刀判契其旁，故曰契券。

⑨卷之十三 雜篇外物三十 內通「胞」並交切。腹中胎也。說文生兒裹也。

〔參照〕『集韻』平聲五爻「胞」班交切。生兒裹也。

『集韻』平聲五爻「胞」披交切。說文兒生裹也。

大徐本『說文』卷九上「胞」兒生裹也。从肉从包。匹交切。

⑩卷之十三 雜篇外物三十 內通「柴」說文小木散材也。徐鉉四師行野次立散木爲區落、名曰柴籬。（下略）  
〔參照〕『集韻』平聲十三佳「柴」鉅佳切。說文小木散材也。徐鉉曰師行野次豎散木爲區落、名曰柴籬、亦  
姓。

などがあり、これらを見れば『南華音義』が『説文』のものではなく、『集韻』から孫引きしていることが看取され、やはり陳景元が『集韻』の注釋文を採用しているといってもよからう。また、次の例からも『南華音義』の注釋が『集韻』に依っていることが分かる。

⑪卷之二 内篇齊物論二 齊物「庸詎」其據切。字林云未知詞也。庸謂常也。詎何也。

(參照)『集韻』去聲九御「詎」其據切。字林未知詞也。或作渠。

しかし、すべてがすべて『集韻』というわけでもなく、

⑫卷之四 内篇大宗師六 才道相胥「聶」説文附耳小説也。謂密相許與也。

(參照)『大廣益會玉篇』卷第四 耳部「聶」如獵女涉二切。説云附耳小説也。

『集韻』入聲二十九葉「聶」昵輒切。説文附耳私小語也。亦姓。

大徐本『説文』卷十二上「聶」附耳私小語也。从三耳。尼輒切。

のような例も少数ではあるが見られる。このことから、陳景元は『大廣益會玉篇』と『集韻』をともに参照した可能性が高い。

また、さらに面白いのが『集韻』そのものの引用例である。『集韻』の書名は陳氏の注釋文の中に三例見られるが、次の一例は、『集韻』が出典を示さずに注釋を引用したものである。陳氏は素直にそのまま『集韻』を出典として孫引きしている。

⑬卷之八 雜篇在宥十七 化空「蹷蹷」姑衛切。成云驚動貌。集韻僵也。一曰跳也。(下略)……

(參照)『集韻』去聲十三祭「蹷」姑衛切。僵也。一曰跳也。或从衛从走，亦書作蹷。

その『集韻』はおそらく『玉篇』を参照したのではないかと思われる。

(参照)『大廣益會玉篇』卷第七 足部 「蹙」渠月居月居衛三切。説文僵也。一曰跳也。さらに『集韻』にかんして気になる例が一例見られる。

⑭卷之十三 雜篇外物三十 急難「貸」本亦作貢、音特。群經音辯云取於人曰貢、與之曰貸。

(参照)『群經音辨』卷第六 辨彼此異音「取於人曰貢」他得切、字亦作貢。「與之曰貸」他代切。

これと類似する注釋は『集韻』や『玉篇』『廣韻』にも見えず、陳景元が直接『群經音辨』から引用した可能性が高いのだが、たった一例のみでは斷定できない。『集韻』と『群經音辨』および『經典釋文』の關係は、水谷氏の研究に詳しく、右例も水谷氏が指摘されるように『集韻』が採用しなかった『群經音辨』の注釋の一つと考えられるのかもしれない。<sup>(23)</sup>

このほか、『南華音義』が最も多く引用するのが『史記』である。全部で三十四例見られる。いずれも主に人物を説明するために附された注に引用されており、『莊子音義』ではあまり詳細に解説されていないため陳景元が敢えてほどこしたと考えられるものばかりである。次の例から、陳景元が『史記集解』等の注釋書に依った可能性も推測される。

⑮卷之四 内篇大宗師六 不遷化「善天」徐廣注史記云天幼少也。張君房本作少、詩照切。

(参照)『史記集解』卷四 「(前略)……後宮童妾所棄妖子」徐廣曰妖一作天、天幼少也。

また、『上清音義』に多數引用される史崇の『一切道藏音義』が一例のみ見られる。

⑯卷之十三 雜篇外物三十 内通「滅」本作滅、音滅。字林云批也。史崇藏經音義云滅手拔也。

このように佚書から引用している可能性もあるため、陳景元の目睹した書物を正確に特定するのは困難であるけれども、上で見たように少なくとも、『大廣益會玉篇』『集韻』の義注から引用したことは否定できない。そして本稿にとって、この二書には音注が附されているという點が重要な意味を持つてくるであろう。

### 第三章 音注の分類

次に『南華音義』の音注について検討する。前稿において『南華音義』の音注は『莊子音義』の音注を多數採用しているが、いくつか異同が見られることをすでに指摘し、さらに『南華音義』の音注と天本の音注を比較し、それらに相違がある場合には北本の音注をも示して、それを一覽表にまとめた。本稿ではその一覽表を利用し検討を加えていきたいと考えているが、本稿で最終的に明らかにしたいことは陳景元が反切改良を行ったか否か、そして改良したのであればどのように改良した痕跡が見られるのか、という點にある。したがって、特に反切に重きを置いて考察することにした。そこで、『南華音義』に收められた反切のうち、『莊子音義』の音注とも合致しないものについてのみ抜粋し、検討していきたいと思う。<sup>24)</sup>

本稿をまとめるに当たり、今一度、再確認した結果、前稿において印刷の際に脱落した音注や誤植が數箇所見受けられたので、それらを訂正しながら、さらに前稿で示した『南華音義』音注と『莊子音義』の天本とも北本とも音注が合致しないものを選び出した。そのうえで、『莊子音義』については黃華珍氏の校勘および『經典釋文彙校』を参照し、比較對象として掲げる。同時に、前章で見たように、『南華音義』の注釋部分が『集韻』の影響を色濃く受けていることを鑑み、『集韻』の反切と比較した。また中古音の代表として、そして汪二〇四aでの



比較を考慮し、『廣韻』の反切をも参考までに並べた。このようにして、『南華音義』の反切を次の十三種類に分類してみた。

- A 用字が『廣韻』『集韻』と全同の例
- B 用字が『廣韻』とのみ一致する例
- C 用字が『集韻』とのみ一致する例
- D 用字は異なるが『莊子音義』『廣韻』『集韻』と同音の文字を用いる例<sup>(25)</sup>
- E 用字は異なるが『莊子音義』と同音の文字を用いる例
- F 用字は異なるが『廣韻』『集韻』と同音の文字を用いる例
- G 用字は異なるが『廣韻』と同音の文字を用いる例
- H 用字は異なるが『集韻』と同音の文字を用いる例
- I 折衷例<sup>(26)</sup>
- J 『南華音義』の誤字と思われる例
- K 『莊子音義』の誤字を、『南華音義』で正したと考えられる例
- L 上記のいずれにもあてはまらない例
- M その他

この分類に基づき、以下それぞれ類別される反切の例すべてを表にまとめ列挙する。ただし、FとGには該当する例が無いので、実際には十一種類となる。なお便宜的に番號を付しておく。<sup>(27)</sup>

〈表一〉 A 用字が『廣韻』『集韻』と全同の例

番號	歸字	『南華音義』	『莊子音義』	『廣韻』	『集韻』
A 16	謫	陟革切	直革反	陟革切	陟革切
A 15	捷	疾葉切	—	疾葉切	疾葉切
A 14	鞞	古祿切	—	古祿切	古祿切
A 13	過	古臥切	—	古臥切	古臥切
A 12	籍 <sup>(28)</sup>	秦昔切	—	秦昔切	秦昔切
A 11	敦	都昆切	—、一音丁回反	都昆切	都昆切
A 10	繕	時戰切	善戰反	時戰切	時戰切
A 9	削	息約切	七妙反	息約切	息約切
A 8	離	力智切	—	力智切	力智切
A 7	卓	竹角切	中學反	竹角切	竹角切
A 6	柚	餘救切	由救反、徐以救反	餘救切	餘救切
A 5	蜃	魚列切、或作孽	(孽)彦列反	魚列切	魚列切
A 4	襍	於喬切	—	於喬切	於喬切
A 3	茈	莫報切	—	莫報切	莫報切
A 2	槁	古老切	枯老反	古老切	古老切
A 1	斥	昌石切	—	昌石切	昌石切

〈表二〉 B 用字が『廣韻』とのみ一致する例

番號	歸字	『南華音義』	『莊子音義』	『廣韻』	『集韻』
B 1	膠 <sup>(29)</sup>	古肴切	徐李古孝反	古肴切	居肴切
B 2	培	薄回切	音裴、徐扶杯反	薄回切	鋪枚切
B 3	佗 <sup>(30)</sup>	徒河切	徒何反	徒河切	湯何切
B 4	囂	許嬌切	許橋反、又五羔反	許嬌切	虛嬌切
B 5	緘 <sup>(31)</sup>	古威切	古滅反	古威切	居威切
B 6	伉	苦浪切	—	苦浪切	口浪切
B 7	汨	古忽切	胡忽反	古忽切	吉忽切
B 8	齊	側皆切	—	(齋)側皆切	莊皆切
B 9	脫	音奪、他括切	音奪	他括切	徒括切
B 10	璋	于鬼切	—	于鬼切	羽鬼切
B 11	穎	渠追切	徐去軌反、郭苦對反	渠追切	渠龜切
B 12	殛	紀力切	—	紀力切	訖力切
B 13	閑	古覓切	古閑反	古閑切、古覓切	居閑切、居覓切
B 14	取 <sup>(32)</sup>	七句切	—	七庚切、(娶)七句切	(取娶)此主切



C 60	C C C C C C C C C C C C C C C C	C C C C C	C C	C C C C C C C C	C C C
傀	擣 <small>(37)</small> 郤 遺 殛 柢 髀 談 順 從 履 漱 稍 演 約 洫 蛇 驚	券 朱	櫛 恂 投 蹶 薄 藏 施	脛 藝 <small>(34)</small> 乳	
郭呼乖切	乃豆切 乞約切 夷佳切 紀力切 戶禮切 戶禮切 殊閏切 才用切 俱遇切 所救切 山巧切 似淺切 乙却切 沉壁切 餘支切 魚到切	音勸、一曰止也 達眷切	鍾輸切 須倫切 朱戍切 姑衛切 伯各切 才浪切 以豉切	形定切 倪祭切 儒遇切	
郭徐呼懷反	乃豈反 (匱)求位反 去逆反 丁計反 戶寡反、郭欺禍反 胡啓反、又音奚、又苦迷反 <small>(35)</small> 疾容切 九遇切 所祐切 所教切 以淺切 於略切 沉逼切 弋支切 五到切	音勸 亦作櫛、郭音節、徐側冀反	(欬)莊筆反、又作攢 音旬 (注)之樹反 紀衛反 以智反 刑定反 如樹反		
呼乖切	乃豆切 乞約切 夷佳切 紀力切 戶禮切 戶禮切 殊閏切 才用切 俱遇切 所救切 山巧切 似淺切 乙却切 沉壁切 餘支切 魚到切	達眷切 鍾輸切	側瑟切 須倫切 朱戍切 姑衛切 伯各切 才浪切 以豉切	形定切 倪祭切 儒遇切	
一	奴豆切 以追切 <small>(36)</small> 都禮切 苦瓦切 胡禮切 食閏切 疾容切 九遇切 所祐切 所教切 以淺切 於略切 沉逼切 弋支切 五到切	去願切 章俱切	阻瑟切 相倫切 居戍切 博各切 徂浪切 施智切 胡定切 魚祭切 而主切		

〈表四〉 D 用字は異なるが、『莊子音義』『廣韻』『集韻』と同音の文字を用いる例

番號	歸字	『南華音義』	『莊子音義』	『廣韻』	『集韻』
D 3	藿	徒吊切	徒弔反	徒弔切	徒弔切
D 2	調	徒吊切	徒弔反	徒弔切	徒弔切
D 1	噉	古吊切	古弔反	古弔切	古弔切

〈表五〉 E 用字は異なるが、『莊子音義』と同音の文字を用いる例

番號	歸字	『南華音義』	『莊子音義』	『廣韻』	『集韻』
E 7	簪	徒河切	徒何反	託何切	湯何切
E 6	瞿	居橋切	居喬反、又巨消反	舉喬切	居妖切
E 5	肘	疋亦切	匹亦反	芳辟切	毗亦切
E 4	見	賢徧切	賢遍反	胡旬切	形旬切
E 3	僻	竹九切	竹久反	陟柳切	陟柳切
E 2	橋	紀俱切	紀具反	其俱切	權俱切
E 1	他	莫逗切	莫豆反	莫候切	莫候切

〈表六〉 H 用字は異なるが『集韻』と同音の用字を用いる例

番號	歸字	『南華音義』	『莊子音義』	『廣韻』	『集韻』
H 1	蛆	子餘切	(且)子徐反	子魚切	子余切
H 2	跬	犬藥切	徐丘碑反、郭音曆 向丘氏反、李却垂反	丘弭切	犬藥切

〈表七〉 I 折衷例

番號	歸字	『南華音義』	『莊子音義』	『廣韻』	『集韻』
I 1	旁	薄葬蒲光二切	薄葬反、徐扶葬反	步光切	蒲光切
I 2	頰	渠追切、徐去軌切	徐去軌反、郭苦對反、 李音仇、一音逵	渠追切	渠龜切
I 3	償	展羊時亮二切	時亮反、又音賞	市羊切	展羊切、時亮切
I 4	濫	盧敵切 或作檻、胡暫切	徐胡暫反、或力暫反	盧敵切	盧敵切、胡暫切

〈表八〉 J 『南華音義』の誤字と思われる例

番號	歸字	『南華音義』	『莊子音義』	『廣韻』	『集韻』
J 1	數	所渝切	所喻反	色句切	雙遇切
J 2	擎	其驚切	徐其驚反	渠京切	渠京切
J 3	少	許照切	—	失照切	失照切
J 4	倪	五圭切	徐五佳反、郭五第反	五佳切	宜佳切
J 5	瞋	赤真亦夷二切	赤真反、徐赤夷反	昌真切	稱人切、癡鄰切
J 6	離	力離切	力智反	力智切	力智切
J 7	泄	息例切	息列反、徐以世反	私列切	私列切
J 8	縵	或半切	武半反、又武諫反	莫半切	莫半切
J 9	團	除丸切	徒丸反	度官切	徒官切
J 10	離	人智切	—	力智切	力智切
J 11	鞞	古綠切	—	古祿切	古祿切
J 12	決	喜欲乎穴二切	向徐喜欲反、李呼穴反	古穴切	古穴切
J 13	鑄	朱庶切	之樹反	之戌切	朱戌切
J 14	宛	於院切	於阮反	於阮切	委遠切
J 15	轆	刀的切	—	郎擊切	狼狄切
J 16	詰	公吉切	李去吉反、徐起列反	去吉切	喫吉切
J 17	復	扶父切	扶又反	扶富切	扶富切
J 18	轅	无元切	—	兩元切	于元切
J 19	輕	才全切	七全反、又視專反、又音權	市緣切	遂緣切



〈表九〉 K 『莊子音義』の誤字を、『南華音義』で正したと考えられる例<sup>(38)</sup>

番號	歸字	『南華音義』	『莊子音義』	『廣韻』	『集韻』
K 1	介	古太切	古八反	古拜切	居拜切、訖黠切
K 2	滑	乎八切	于八反	戸八切	戸八切
K 3	辟	必碩切	必領反、又婢亦反	必益切	必益切
K 4	遁	塗困切	徐困反	徒困切	徒困切
K 5	唯	惟癸切	唯癸反	以水切	愈水切
K 6	假	更夏切	更百反 <sup>(39)</sup>	古訝切	居迓切
K 7	縵 <sup>(40)</sup>	末且切	未且反	謨晏切	莫半切
K 8	冒	莫報切	苦報切	莫報切	莫報切

〈表十〉 L 上記のいづれにもあてはまらない例

番號	歸字	『南華音義』	『莊子音義』	『廣韻』	『集韻』
L 1	治(41)	直基切	—	直之切	澄之切
L 2	栩	沉甫切	沉羽反	沉羽切	火羽切
L 3	軋	於黠切	(札)於八反、又側八反	烏黠切	乙黠切
L 4	語	魚據切	魚豫反	牛倨切	牛據切
L 5	散(42)	悉旦切	悉但反	蘇肝切	先肝切
L 6	腐	奉斧切	扶甫反	扶雨切	奉甫切
L 7	桎	之石切	之實反、郭眞一反	之日切	職日切
L 8	選	宣轉息戀二切	宣轉反、舊思緩反	息究切、息絹切	須究切、須絹切
L 9	翅	詩智切	徐詩知反	施智切	施智切
L 10	藩	父煩切	甫煩反	甫煩切、附衰切	方煩切、符衰切
L 11	斲	恨沒切	李音紇、恨發反、 徐胡勿反、郭又胡突反	下沒切、胡結切	胡骨切、奚結切
L 12	羈	古宜切	居宜反	居宜切	居宜切
L 13	重(43)	直用切	—	柱用切	儲用切
L 14	難	乃但切	乃旦反	奴案切	乃旦切
L 15	鋪	蒲故切	布吳反、徐甫吳反	普故切	普故切
L 16	隙	去逆切	—	綺戟切	乞逆切
L 17	折	之舌切	—	旨熱切	之列切
L 18	簞	以歲切	似歲反、徐以醉反、郭子稅反、 李尋悲反、信醉反、或蘇忽反	于歲切、祥歲切	兪芮切、旋芮切

M 2	M 1	番號
處	胞	歸字
召據切	並交切	『南華音義』
昌據反	普交反	『莊子音義』
昌據切	匹交切	『廣韻』
昌據切	蒲交切、披交切	『集韻』

へ表十一へ M その他

L 34	L 33	L 32	L 31	L 30	L 29	L 28	L 27	L 26	L 25	L 24	L 23	L 22	L 21	L 20	L 19
挫	莽	嫗	惡	礪	詭	衍	膾	粗	委	報	軋	醞	喪	少	侗
寸臥切	莫浪莫朗二切	烏遇切	爲路切	薄博切	九委切	以戰切	時兗切	七奴切	於危切	女展切	於黠切	隱紀切	息浪切	詩照切	吐東切
徐子臥反、郭租禾反	莫浪反、或莫郎反	於禹反	烏路反	蒲博反	—	—	—	—	—	—	烏黠反	李音意、一音他感反	於界反、郭於感反	—	吐功救動二反
則臥切	模朗切	衣遇切	烏路切	傍各切	過委切	子線切	市兗切	倉胡切	於爲切	尼展切	烏黠切	於擬切	蘇浪切	失照切	他紅切
祖臥切	謨郎切、母朗切	威遇切	烏故切	白各切	古委切	延面切	豎兗切	聰徂切	邕危切	尼展切	乙黠切	隱己切	四浪切	失照切	他東切

右により『南華音義』には『莊子音義』以外に『廣韻』『集韻』に出現する反切と同じものが出現していることが分かる。具體的には『南華音義』の反切で『莊子音義』の反切と全同でないもの(百六十九例)のうち、過半数以上の反切(九十例)が『廣韻』『集韻』の兩方、あるいはいずれかと合致し、『廣韻』『集韻』の兩方と合致する反切数は十六、『廣韻』のみと合致する反切数は十四、『集韻』のみと合致する反切数は六十)、そしてその數からみれば『廣韻』よりも『集韻』の反切と合致するものが圧倒的に多いことが分かる。このことは、前章でみたように、『南華音義』義注において『集韻』注釋文が多く採用されているという状況と符合しており、陳氏が『集韻』を音義ともに重用していたことが窺い知れよう。

陳景元が『莊子音義』の反切を踏襲せずにわざわざ改め、これら『廣韻』『集韻』の反切を『莊子』(『南華真經』)の新たな音注として採用した背景には、何らかの意識がはたらいたからであろう。とくに『集韻』は反切改良史において重視される韻書である以上、陳景元が反切の改良を意圖して『集韻』の反切を多く採った可能性がある。したがって、次章では、陳景元が『莊子音義』に依らずに採用したこれらの反切を、とりわけ改良という面から検討してみたいと思う。

#### 第四章 反切の比較検討

反切改良を意圖して反切を更改したと認められるにはいくつかの条件を満たすことが必要である。本稿では、『上清音義』との関連に配慮し、汪二〇〇四aにしたがい、次の条件から反切改良を考察することとした。<sup>(4)</sup> 但し、最後の「五」は筆者が反切改良に缺かせない要素として今回新たに付した条件である。

- 一、上下字の開合が一致するか||開合と略稱し、一致していれば十印を附す。
- 二、上下字の洪細が一致するか||洪細と略稱し、一致していれば十印を附す。
- 三、上下字の等が一致するか||等列と略稱し、一致していれば十印を附す。
- 四、上字が陰聲韻であるか||上字陰と略稱し、陰聲韻であれば十印を附す。
- 五、下字がゼロ聲母であるか||下字零と略稱し、ゼロ聲母であれば十印を附す。

この条件に當てはまるか否かを、前章で分類した順にみていくこととする。ただし、『莊子音義』に收められない音注は比較のしようがない上に、『南華音義』では『莊子音義』に收められないために獨自に附さざるを得なかったと考えられ、<sup>(45)</sup>陳景元が用字の改良を意圖して採用した反切であるとは判断しがたい。そのため検討對象から外すこととする。『莊子音義』に直音音注のみが示される場合は、兩書の反切の比較ができないため、やはり考察の對象から外す。ただし、直音音注と反切が併記されている場合は、たとえその反切が陸徳明が引用した他書の反切であっても検討の對象とする。

分類されるものがないF・Gは無論のこと、『莊子音義』の反切を轉寫し誤ったと思われるJ、『莊子音義』の誤字を正したと思われるKも、結局は陳景元が『莊子音義』の反切改良を意圖して用字を更改したのではないと判断できるため、検討の對象から外す。Dは三例とも同じ文字の異體と認められるため、對象から外した。Eは偏の相違<sup>(46)</sup>または異體字<sup>(47)</sup>と認められるもので、いずれも中古音<sup>(48)</sup>では同音字である。これも陳景元が改良を意圖して『莊子音義』の反切用字を更改したとは考えにくいため、外すこととした。

Mのグループは個別に検討する必要がある。まずM1の『莊子音義』「胞 普交反」<sup>(49)</sup>(肴韻滂母)を、『南華音義』

では「胞 並交切」(肴韻並母)へと聲母の異なる反切に變えている。『廣韻』には「南華音義」に該当する並母反切が見あたらず「匹交切」(肴韻滂母)があるのみであるが、<sup>(30)</sup>『集韻』には「蒲交切」(肴韻並母)「披交切」(肴韻滂母)の二切が見られるため、陳景元の念頭にはこの並母の音があったのかもしれない。しかし一方で、「並」字と「普」字との形が見方によっては似てくはないため、誤字の可能性も棄てきれない。誤字か聲母の變更かは判断しがたいが、いずれにせよ、反切用字の改良を意圖して用字を更改したとは考えにくいため、検討の対象から外すことができよう。同様に、M2も「莊子音義」の「處 昌據切」(御韻昌母)が「南華音義」「召據切」(御韻澄母)に變えられている。『廣韻』『集韻』とも該当する音の反切は收められず、『經典釋文』中にも同じ反切は見えないため解釋に苦しむが、あるいは「昌」字を誤寫したのかとも考えられる。これもやはり反切改良を意圖して用字を改めたとは考えにくいため、外した。

Mのグループで見たように、陳景元が『莊子音義』とは明らかに異なる音を示す反切の例を採用している場合は、これは反切用字の更改というよりは、被注字の義ないしはその他の事由により、音じたいを變えたもの(すなわち變更)とみなし、反切改良を検討する対象からは外すこととする。

このようにして考察の対象として残ったのは、A・B・C・H・I・Lに分類された例である。以下、Aから順を追って検討していくこととしたい。

### 第一節 A 用字が『廣韻』『集韻』と全同の例

先にも述べたが、陳景元が反切を變更した場合、反切改良を検討する対象からは外すこととする。Aの反切

の例の中で具體例をあげれば、「2稿」(皓韻見母)に對して『莊子音義』では「枯老反」(皓韻溪母)であるが、『南華音義』は「古老切」(皓韻見母)へと變更されている。これは『莊子音義』の反切の音では被切字と聲母が異なるために、おそらく陳景元は上字を見母字へ變えたのであって、反切の用字の更改というよりは、『莊子音義』の音を陳景元が考える正しい音の反切へと、用字を變えたものと理解したほうがよいと考えるからである。<sup>(51)</sup>このような例は他にも、

A 9 削(萊韻心母) 『莊子音義』七妙反(笑韻清母) ↓ 『南華音義』息約切(萊韻心母)  
 A 16 謫(麥韻知母) 『莊子音義』直革反(麥韻澄母) ↓ 『南華音義』陟革切(麥韻知母)

があり、これも反切改良の考察對象から外す。このようにして残ったのは、Aでは次の四例のみとなった。

		『南華音義』『廣韻』『集韻』				『莊子音義』							
番號	歸字	反切	開合	洪細	等列	上字陰	下字零	反切	開合	洪細	等列	上字陰	下字零
A 5	蠶	魚列		+	+	+		彥列	+	+	+		
A 6	柚	餘救			+			由救				+	
A 7	卓	竹角						中學					
A 10	縑	時戰	+					善戰	+				

## 第二節 B 用字が『廣韻』とのみ一致する例

BもAと同様の基準で反切を變更したと思われるものは、

B 1 膠(肴韻見母) 『莊子音義』 古孝反(効韻見母)

↓ 『南華音義』 古肴切(肴韻見母)・『集韻』 居肴切(肴韻見母)

B 2 培(灰韻並母) 『莊子音義』 音裴(灰韻並母) 徐扶杯反(灰韻奉母)

↓ 『南華音義』 薄回切(灰韻並母)・『集韻』 蒲枚切(灰韻並母) 鋪枚切(灰韻滂母)

B 5 緘(咸韻見母) 『莊子音義』 古減反(謙韻見母)

↓ 『南華音義』 古咸切(咸韻見母)・『集韻』 居咸切(咸韻見母) 公陷切(陷韻見母)

B 11 頰(脂韻羣母) 『莊子音義』 徐去軌反(旨韻溪母) 郭苦對反(隊韻溪母)

↓ 『南華音義』 渠追切(脂韻羣母)・『集韻』 渠龜切(脂韻羣母)

B 13 閒(禰韻見母) 『莊子音義』 古閑反(山韻見母)

↓ 『南華音義』 古覓切(禰韻見母)・『集韻』 居閑切(山韻見母) 居覓切(禰韻見母)

の五例あり、これらは対象から外した。B 2は『莊子音義』の直音注は問題ないが、徐邈の反切上字は陳景元の頃には異なった音として認識されたため變更したのであろう。これも反切の改良というよりはやはり陳景元が想定する正しい聲母へと變更したものと捉え、外すこととした。また、上のAでは見られなかった例であるが、B 1・B 5・B 13は韻が變更されている。B 11に至っては韻・聲母とも徐音郭音のいずれも異なっているため變更したのであろう。これら五例を除けば、改良の可能性を検討すべきものは以下のようになる。



			『南華音義』	『廣韻』				『莊子音義』				『集韻』	
番號	歸字	反切	開合	洪細	等列	上字陰	下字零	反切	開合	洪細	等列	上字陰	下字零
B 7	汨	古忽	+	+	+	+		胡忽	+	+	+	+	
B 4	叢	許嬌	+	+	+	+		許嬌	+	+	+	+	
B 3	佗	徒河	+	+	+	+		徒何	+	+	+	+	
									+	+	+	+	
												+	

第三節 C 用字が『集韻』とのみ一致する例

Cも前記同様に、變更したと思われる例は以下の三例がある。

C 1 鯤（魂韻見母）『莊子音義』徐音昆（魂韻見母）李侯溫反（魂韻匣母）

↓ 『南華音義』公渾切（魂韻見母）・『廣韻』古渾切（魂韻見母）

C 46 約（葉韻影母）『莊子音義』徐於妙反（笑韻影母）

↓ 『南華音義』乙却切（葉韻影母）・『廣韻』於略切（葉韻影母）

C 57 遺（脂韻以母・至韻以母）『莊子音義』（匱）求位反（至韻羣母）

↓ 『南華音義』夷佳切（佳韻以母）

『廣韻』以追切（脂韻以母）・以醉切（至韻以母）・匱」求位反（至韻羣母）

右三例を除いた残りの反切の状況は以下のようである。

C 45	C 43	C 40	C 38	C 37	C 34	C 33	C 31	C 25	C 23	C 21	C 19	C 18	C 15	C 14	C 13	C 11	C 8	C 7	C 6	番號
油(58)	鶯	櫛	投	獸	施	脛	乳	句	崔	警	絮	紐	殺	獮	詎	油	辟	狂	藐	歸字
況壁	魚到	側瑟	朱戊	姑衛	以歧	形定	儒遇	俱遇	取猥	牛刀	奚結	女九	何交	匹羨	其據	弋質	毗赤	渠王	頭沼	反切
		+	+	+	+	+	+	+	+	+	+		+	+		+	+	+	+	開合
	+		+		+	+	+				+	+	+	+	+	+	+	+	+	洪細
		+	+		+	+	+				+	+		+	+	+	+	+	+	等列
	+		+	+	+		+	+	+	+	+	+			+		+	+	+	上字陰
																				下字零
許的	五報	莊筆	之櫛	紀衛	以智	刑定	如樹	俱樹	千罪	五蒸	戶結	女酒	戶交	篇面	其庶	已質(52)	毗赤	求匡	妙紹	反切
		+			+	+	+	+						+		+	+		+	開合
	+	+	+	+	+	+	+	+		+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	洪細
		+	+	+	+	+	+	+		+		+		+	+	+	+	+	+	等列
	+	+		+	+	+		+	+	+	+	+	+		+	+	+	+	+	上字陰
																				下字零
	五到	阻瑟	之戊	居衛	施智	胡定	而主(57)	九遇(56)	倉回(55)	五勞	胡結	女久	胡茅	毗忍(54)	其呂	況逼(53)	房益	巨王	亡沼	反切
				+	+									+			+	+		開合
	+	+	+	+	+		+	+	+	+		+	+	+	+	+	+	+	+	洪細
		+	+	+	+		+	+	+		+		+	+	+	+	+	+	+	等列
	+	+	+	+	+		+	+		+	+	+	+	+					+	上字陰
																		+		下字零

C 59	C 58	C 55	C 54	C 53	C 49	C 47	
擗	郤	柢	髀	譏	漱	演	
乃豆	乞約	典禮	戸瓦	戸禮	所救	似淺	
+	+	+	+			+	
+	+	+	+		+	+	
+	+	+			+	+	
+			+	+	+	+	
	+						
乃荳	去逆	丁計	戸寡	胡啓	所又	似善	虛域
+		+	+			+	+
+	+	+	+		+	+	+
+	+	+			+	+	+
+	+		+	+	+	+	+
奴豆	去約	都禮	苦瓦	胡禮	所祐	以淺	況通(59)
			+			+	
+	+	+			+	+	+
+	+				+	+	+
+	+	+	+	+	+	+	
+							

第四節 H 用字は異なるが『集韻』と同音の文字を用いる例

ここに分類されるのは二例のみで、うちH1は『南華音義』の下字「餘」と『集韻』の下字「余」が異體字である。H2は異なる文字であるが、同音字でしかも形が非常に似ているため、あるいは誤寫なのかもしれないし、または基づくテキストによる相違なのかもしれない。H2の『莊子音義』は三種の反切が示されるが、『南華音義』と同じ上聲紙韻を示すものは向氏の反切であるため、これを対象にする。

H 2	H 1	番號	反切	開合	洪細	等列	上字陰	下字零	反切	開合	洪細	等列	上字陰	下字零	反切	開合	洪細	等列	上字陰	下字零
跬	蛆	歸字	子餘	+	+	+	+		子徐	+	+	+	+		子魚	+	+	+	+	
犬藥	子餘								丘氏						丘弭					



I 3	番號	反切	『南華音義』			反切	『南華音義』			反切	『廣韻』										
	歸字	開合	『莊子音義』				開合	『集韻』			開合										
	價	時亮	+	洪細	等列		+	上字陰	下字零		展羊	+	洪細	等列	+	上字陰	下字零	市羊	+	洪細	等列

I 4	番號	反切	『南華音義』			反切	『莊子音義』							
	歸字	開合	『廣韻』				開合	『集韻』						
	濫	盧敵	+	洪細	等列		+	上字陰	下字零	力暫	+	洪細	等列	+

第六節 L いずれにもあてはまらない例

L に分類される反切は、平たくいえば、『南華音義』反切が『莊子音義』『廣韻』『集韻』のいずれからも踏襲されたと認められないグループである。またいい方を變えれば、『南華音義』の音注を概観した限りでは(あくまで筆者の個人的印象であるが)、おそらく先行の韻書等の音注を参照して採用したのであろうと推察されるものの、具体的な書名等が特定しかねるグループであるともいえる。

以下、上記同様に検討していく。反切の變更とみなされるものは以下の例である。

L 8 選<sup>(60)</sup>(線韻心母) 『莊子音義』舊思緩反(緩韻心母) ↓ 『南華音義』息戀切(線韻心母)

『廣韻』息絹切(線韻心母)

『集韻』須絹切(線韻心母)

(參照) 『春秋左氏音義』ほか「選 息戀切」

L 9 翅(寘韻書母) 『莊子音義』詩知反(支韻書母) ↓ 『南華音義』詩智切(寘韻書母)

『廣韻』施智切(寘韻書母)

『集韻』施智切(寘韻書母)・商支切(支韻書母)

L 10 藩(元韻非母・元韻奉母) 『莊子音義』甫煩反(元韻非母) ↓ 『南華音義』父煩切(元韻奉母)

『廣韻』附袁切(元韻奉母)・甫煩切(元韻非母)

『集韻』符袁切(元韻奉母)・方煩切(元韻非母)

L 11 齷(沒韻匣母) 『莊子音義』恨發反(月韻匣母)・郭胡突反(沒韻匣母) ↓ 『南華音義』恨沒切(沒韻匣母)

『廣韻』下沒切(沒韻匣母)

『集韻』胡骨切(沒韻匣母)

(參照) 『禮記音義』曲禮上一「齷

恨沒反」

L 15 鋪(暮韻滂母) 『莊子音義』布吳反(模韻幫母)・徐甫吳反(模韻非母) ↓ 『南華音義』蒲故切(暮韻並母)

『廣韻』普故切(暮韻滂母)

『集韻』普故切(暮韻滂母)・奔模

切(模韻幫母)

(參照) 『集韻』「舖・醮」蒲故切(暮

韻並母)

L 18 簪(祭韻以母) 『莊子音義』似歲反(祭韻邪母)・郭子梳反(祭韻以母) ↓ 『南華音義』以歲切(祭韻以母)

『廣韻』于歲切(祭韻云母)・祥歲切(祭韻邪母)

『集韻』兪芮切(祭韻云母)・旋芮切(祭韻邪母)

L 22 醜(止韻影母) 『莊子音義』於界反(怪韻影母) ↓ 『南華音義』隱紀切(止韻影母)

『廣韻』於擬切(止韻影母)

『集韻』隱己切(止韻影母)

L 31 惡(暮韻影母) 『莊子音義』烏路反(暮韻影母) ↓ 『南華音義』爲路切(暮韻云母)

『廣韻』烏路切(暮韻影母)

『集韻』烏故切(暮韻影母)

L 33 莽(蕩韻明母) 『莊子音義』莫郎反(唐韻明母) ↓ 『南華音義』莫朗切(蕩韻明母)

『廣韻』模朗切(蕩韻明母)

『集韻』母朗切(蕩韻明母)

(參照) 『史記集解』卷六十七仲尼弟子七引 『史記音義』

「莽 莫朗反」

L 34 挫(過韻精母) 『莊子音義』徐子臥反(過韻精母)・郭租禾反(戈韻精母) ↓ 『南華音義』寸臥切(過韻清母)





	番號	『南華音義』				『莊子音義』			
L 12	歸字	反切	開合	洪細	等列	上字陰	下字零	反切	開合
	𪛗	古宜				+		居宜	洪細
								+	等列
								+	上字陰
									下字零

	番號	『南華音義』				『莊子音義』				『廣韻』				『集韻』																								
L 32	歸字	反切	開合	洪細	等列	上字陰	下字零	反切	開合	洪細	等列	上字陰	下字零	反切	開合	洪細	等列	上字陰	下字零																			
L 30	𪛗	烏遇	薄博	吐東	之石	奉斧	悉旦	魚據	於點	於禹	浦博	吐功	之實	扶甫	悉但	魚據	於八	衣遇	傍各	他紅	之日	扶雨	蘇肝	牛侶	烏點	威遇	白各	他東	職日	奉甫	先肝	牛據	乙點					
L 19		+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
L 7																																						
L 6																																						
L 5																																						
L 4																																						
L 3																																						

第七節 小結

以上、本章では『南華音義』の反切を『莊子音義』『廣韻』『集韻』の反切と比較し、用字の改良が見られるかを一覽できるようにまとめ示した。確かに『南華音義』の個別の反切において改良の痕跡がうかがえるといふ例は若干存在するものの、全體を見渡してみると、陳景元が意識的に改良を行ったと斷言できるだけの證據は

甚だ乏しいといわざるを得ない。おそらく陳景元が『南華音義』を編むにあたり、手元にあった韻書等を引きながら、最もふさわしいと思う義注および反切を拾いあげたのであろうと解釋する方が自然である。むしろ、Cに見られるように、陳氏が『集韻』から大量に反切を採用した結果、はからずも改良されたかのような印象を與えているにすぎないと思われ、『南華音義』の反切改良の状況を見る限りでは、陳氏が用字の改良を行わんとして独自の反切を創作したとは考えにくい。ただし、おそらく『集韻』の反切が陳氏にとっても、より音を理解しやすいものであったため多く採用したのであろうことは首肯できよう。

## 第五章 『上清音義』について

次に、同じ陳景元の著『上清音義』の反切を見ていくこととする。もちろん、『南華眞經』と『上清大洞眞經』とは經典としての内容・性格が異なるため、一律に論じることが難しいけれども、本稿の冒頭部分で述べたように、『南華音義』と『上清音義』は陳氏の晩年の比較的近い時期に續けて編まれたと推察され、しかも兩書ともに音注を有する。したがって同じく反切の検討対象とした。實際に『上清音義』を繕くと、「音義」の引用書として『篇』『韻』『集韻』の書名が散見され、やはり『南華音義』同様これらの先行書を参照して『上清音義』を著したことに疑いを入れない。ただし、『上清音義』のみの特徴として「史崇作△、音■」や「史崇○▲切」と記されていることが多い。この點は『南華音義』とは異なっており、これら史崇の音注についてはすでに汪業全氏の論考に詳しく考察されている。

汪業全氏はまず『上清音義』から史崇からの孫引きと思われる音注を抜き出し、二つの論考にまとめられた。

一つは本稿の最初に掲げた汪二〇〇四aである。もう一つは「史崇玄『一切道經音義』考」である。前者は前稿でも言及したことだが、陳景元の著した音注部分から依據した史崇の音注を排除し、さらに『上清音義』音注と『廣韻』『集韻』との關連について十分に配慮したうえで反切の異同を調査されたものである。その結果、陳景元が採用したと思われる反切を七十四例舉げておられる。<sup>(67)</sup>うち重複するもの(つまり被切字・反切上下字とも全同。具體的には7・14・62・68・69・70・73)<sup>(68)</sup>を除けば六十七例、その中には『廣韻』『集韻』兩書と同じ反切が十二含まれており、『廣韻』のみと同じ反切は十五、『集韻』のみと同じ反切が十九、<sup>(69)</sup>したがって『上清音義』独自の反切と考えられるものは二十一例ということになる。<sup>(70)</sup>さらに、奇妙な反切「60衣 衣既切」を例外(あるいは誤寫とすべきか)と見なせば、以下の二十例に『集韻』を繼ぐ反切改良が見られるということになるであろう。<sup>(71)</sup>

本稿では、これら汪二〇〇四aで抽出された反切二十例に加え、上で検討した『南華音義』との比較の便宜を考慮し、『集韻』反切も併せて列舉する。さらに兩書の反切改良を示す条件の状況を汪二〇〇四aに倣って分析し一覽表にまとめてみた。以下に示す。<sup>(72)</sup>

			『上清音義』			『集韻』		
番號			歸字			反切		
50	49	48	襄	唱	翰	去焉	赤亮	胡岸
			+	+		+	+	
			+	+	+	+	+	+
			+	+	+	+	+	+
			+		+	+		+
			+			+		
			丘虔	尺亮	侯肝	反切	開合	洪細
			+	+	+	+	+	+
			+	+	+	+	+	+
			+	+	+	+	+	+
					+			+
								下字零

74	72	71	67	66	65	64	63	61	59	58	57	56	55	53	52	51
咤	重	帷	腦	解	少	覆	汨 <sub>(79)</sub>	要	日	嗟	蕪	颺	麾 <sub>(75)</sub>	莽 <sub>(74)</sub>	掇	觀 <sub>(73)</sub>
知加	直龍	于悲	乃皓	胡買	失召	芳救	古沒	一遙	而質	咨鴉	烏董	必遙	呼爲	莫黨	多活	古段
+			+		+		+	+	+	+	+	+	+	+		+
	+	+	+	+	+	+	+	+	+		+	+		+	+	+
		+	+		+	+	+	+	+	+	+	+		+	+	+
+		+	+	+			+		+	+	+		+		+	+
		+									+					
陟加	傳容	于龜	乃老	下買	失照	敷救	吉忽	伊消	入質	咨邪	鄔孔	卑遙 <sub>(76)</sub>	吁爲	母朗	都括	沽丸
+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	+	+	+	+	+	+		+	+		+	+	+	+	+	+
		+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
			+	+	+		+		+	+	+	+	+	+	+	+

64・66・71はむしろ『集韻』反切のほうが改良が進んでいるとみなされよう。しかしながら若干のもの(具體的に  
 上表により兩書の反切を比較してみると、即座には『上清音義』の反切改良を看取し難い。特に53・55・61・

は50・58・59・63)は、確かに改良の痕跡が伺えるが、四例のみである。しかもうち一例はおそらく『大廣益會玉篇』の反切を踏まえた可能性がある。そうすると、たった三例しか無く、これのみで果たして陳景元が反切を改良したと断定できるであろうか。

## むすび

本稿を記すにあたり、當初は汪二〇〇四aの提示された結論(すなわち陳景元の反切に改良の意圖が見られるという論旨)を補強すべく、『南華音義』の反切の分析を試みようとして着手したわけであるが、意に反し、『南華音義』の反切には特筆すべきような改良は看取されることが明らかとなった。反切改良史に新たな成果を加えることができなかつたことはやや残念な気もするが、本稿により、『南華音義』の注釋は『莊子音義』をほぼ踏襲していること、踏襲しない注釋は音義とも『集韻』や『大廣益會玉篇』などの既存の字書韻書類を利用した可能性がきわめて高いことを示し得たと考える。

また、『上清音義』の音義も史崇『一切道經音義』から多量に採用しており、史崇音義に依らない『上清音義』の反切は、すでに汪氏が指摘されているように、『廣韻』『集韻』の反切と合致しない新たに改良されたとおぼしき反切も見られるが、本稿でさらに仔細に検討しなおした結果、汪氏の提示された數よりさらに少數の反切(わずかに三例)にしか改良が認められないことが判明した。この數値により、『上清音義』を反切改良史の流れの中へ加えることは疑わしいことをも示せたのではないかと思う。

『南華音義』『上清音義』において、『集韻』の利用の痕跡が認められる以上、『群經音辨』や『類篇』等の利用

も當然考察されねばならないが、本稿ではそれを果たせなかったことは今後の課題である。

(参考文献)

- 汪業全『上清大洞真經玉訣音義』音注考(『桂林師範高等專科學校學報』第十八卷第一期(總第十七期) 二〇〇四年三月)
- 汪業全『史崇玄』一切道經音義考(『廣西師範大學學報(哲學社會學版)』第四十卷第二期 二〇〇四年四月)
- 馮娟・楊超『陳景元道藏音注研究——有關聲母系統的研究』(『西華師範大學學報(哲學社會科學版)』二〇〇五年第二期)
- 虞萬里『天理本『莊子音義』與碧虛子所錄景德本比較研究』(『音史新論——慶祝邵榮芬先生八十壽辰學術論文集』學苑出版社 二〇〇五年)
- 浦山あゆみ『陳景元の音注——『南華真經章句音義』と『莊子音義』との異同を中心に——』(『文藝論叢』第六十八號 二〇〇七年三月)
- 黃焯『經典釋文彙校』中華書局 一九八〇年
- 坂井健一『中國語學研究』汲古書院 一九九五年
- 黃華珍校(海外珍藏善本叢書)『日藏宋本莊子音義』上海古籍出版社 一九九六年
- 黃華珍『莊子音義の研究』汲古書院 一九九九年
- 水谷誠『群經音辨索引』崑崙書房 一九九八年
- 水谷誠『集韻』系韻書の研究』白帝社 二〇〇四年
- 陳國符『道藏源流考』上海書店 一九八九年
- 陳國符『陳國符道藏研究論文集』上海古籍出版社 二〇〇四年

## 〔注〕

- (1) 『道德眞經藏室纂微開題科文疏』はいま、『道藏』(文物出版社 一九八八年)第十三册所収のテキストを用いた。なお、『歷世眞仙體道通鑑』(『道藏精華』臺北自由出版社 一九八〇年所収)卷之四十九では、字は大虚、師號は眞靖、自稱碧虚子、建昌南城の人という。生年も字と同様、一〇二四年(『中華道學通典』南海出版公司 一九九四年)・一〇二五年(『道教事典』平河出版社 一九九四・馮娟二〇〇五)・一〇三四年(汪業全二〇〇四a)・一〇三五年(『中華道教大辭典』中國社會科學出版社 一九九五年)など、複数の説がある。
- (2) 同上『道藏』第四册所収。
- (3) 同上『道藏』第十五册所収。
- (4) 上宮觀は未詳。
- (5) 『宋史』卷十五本紀第十五神宗「熙寧四年十一月丁亥」および「熙寧六年十一月癸丑」の記述による。また『續資治通鑑長編』卷二四四も参照。
- (6) 前掲『道藏』第十五册所収。
- (7) 『道德眞經藏室纂微開題科文疏』卷之一「元豐六年、罷本宮事、歸隱茅山、刊正三洞經法」。
- (8) 前掲『道藏』第二册所収。
- (9) 拙稿参照。以下、これを前稿と稱す。
- (10) 『南華眞經章句餘事』では、「成元英」と書かれており、『南華音義』では「成元英」「成玄英」の表記が兩方混在する。「玄」字の避諱によるものであるが、さほど嚴格ではなかったことがうかがえる。
- (11) おそらく「釋文」すなわち『莊子音義』を附した『莊子』ではないかと考える。
- (12) 葛端は『宋史』徐鉉傳にその名がみえる。大徐とともに『說文解字』の校訂にたずさわった人物という。
- (13) 前掲『歷世眞仙體道通鑑』に傳がみえる。なお『通玄眞經注』はいま『正統道藏』に收められる。
- (14) 『全唐文』卷九二二三に簡單な傳がある。

- (15) 『舊唐書』經籍志では「莊子疏」十二卷 成玄英撰」となっている。
- (16) わざわざこのような注を附してあるのは、『南華音義』あるいは、『南華真經章句餘事』の體裁からして、やや浮いているように思われる。この注の意圖は不明ではあるが、可能性として、一、劉得一は當時からすでにあまり世に知られぬ人物であった、二、劉遂清(『舊五代史』卷九十六 晉書第二十二列傳十一。字は得一)と區別する必要があった、などの理由が考えられるであろう。
- (17) 『莊子音義』では卷下「雜篇讓王第二十八」の末尾にあたる。
- (18) 卷之四「内篇大宗師六」の「游道域」中に「黃法師疏云」という注がある。これは陳氏が對校の際に使用した九種のテキスト中からの孫引きなのか、それとも黃法師が著した書からの引用なのかは判断できない。いま黃法師が特定できないので觸れない。
- (19) 本稿では天本を使用した。
- (20) ここでとりあげるのはあくまで『南華音義』が『莊子音義』に依らず採用した書物であり、『莊子音義』の別の釋文で見られる書物も含む。具體例を挙げれば、『莊子音義』卷上の「内篇逍遙遊第一」の「許由」の釋文に「隱人也。隱於其山。司馬云潁川陽城人。簡文云陽城槐里人。李云字仲武」とあるが、『南華音義』卷之一「内篇逍遙遊一」の「无已逍遙」のところの「許由」の注には「高士傳云字仲武、陽城槐里人。遁耕潁水之陽箕山之下、諡曰箕公」とある。『高士傳』という書名自體は『莊子音義』卷上「内篇齊物論第二」の「王倪」の釋文に「五嵇切、高士傳云王倪・齧歛並堯時賢人」と記すように、『莊子音義』で使用される書物であるが、先の「逍遙遊」では、『南華音義』が『莊子音義』所引の『高士傳』をさらに孫引きしているわけではないので、この場合も陳景元自身が目睹した可能性の高い書物として列挙する。このような書物は『高士傳』以外にも數種ある。
- (21) 澤存堂本(一九八七年中華書局影印)を使用した。
- (22) 特に指定のない限り北京圖書館所藏の宋本(一九八九年中華書局影印)を用いる。
- (23) 水谷誠『集韻』系韻書の研究』第8章参照。水谷氏は主に『群經音辨』に引く『經典釋文』の注釋例が『集韻』



にあまり採用されていないことを指摘されたのであって、必ずしも本稿のこの例とは一致しないが、所引の『經典釋文』部分以外でも『集韻』が『群經音辨』の注釋を採用しなかった例の一つとなりうるであろう。

(24) 北本の方が成立年代としては古いようであるが、黃華珍氏の校勘にしたがえば、天本の方が誤字等が少ないようであるので、前稿同様、本稿でも天本を底本とし、異同がある場合には北本を参照した。

(25) ここでいう「同音の文字」とは異體字もしくは同音字をさす、下同じ。

(26) この「折衷」の意味は、『南華音義』に反切が二つ以上示され、それら複数の反切が『莊子音義』『集韻』『廣韻』のいずれか一書のみの反切と合致するのではなく、それぞれ別の書の反切と合致していることをいう。具體的には『南華音義』の或る反切は『莊子音義』を踏襲し、別の音の反切は『集韻』または『廣韻』から採用し併記している四例をここに分類した。

(27) あくまでも便宜的に番號を付した。この番號は必ずしも『南華音義』の出現順というわけではない。また前稿同様「一一」は該當する反切が見あたらないことを示す。

(28) 前稿では脱落しているので、本稿で補う。

(29) 『莊子音義』の「孝」字を「肴」の字の誤字と捉えれば、或いはKに分類すべきかとも思うが、『廣韻』と合致するのでこちらへ入れることとする。

(30) 「佗 徒河切」は『莊子音義』の「徒何反」と實質的に同じ音と考えられるので、Eに入れる方法も考えられるが、嚴密にはやはり文字が異なるので、こちらに分類をしておく。

(31) 『南華音義』の「威」字を「滅」字の誤字と認めると、或いはJに分類すべきかとも思うが、『廣韻』と合致するのでこちらへ入れることとする。

(32) 前稿では「妻 七句切」となっているが、本稿にて「取 七句切」に訂正する。なお、『南華音義』では「取妻」に對する音注であるので、「取」は「娶」の意と考え、『廣韻』『集韻』の「娶」字反切を併記する。なお、『集韻』は「取」「娶」同音とする。

- (33) 『廣韻』上聲「有」韻には「誑」字は收められないが、該當する反切「息有切」は收められる。
- (34) 前稿では脱落しているのので、本稿で補う。
- (35) 前稿では「苦奚反」となっているが、誤。「迷」に訂正する。
- (36) 『廣韻』平聲「佳」韻に「遺」字は收められず、該當する音を表す反切も收められない。
- (37) 「豆」字を「豈」字の誤字と捉えれば、或いは「」に分類すべきかとも思うが、『集韻』と合致するのでこちらへ分類することとする。
- (38) ここでは字形が似ていたために誤刻(あるいは誤寫)されたとおぼしい例のみを挙げる。
- (39) 前稿では「白」になっているが、誤である。「百」に訂正する。
- (40) 前稿では脱落しているのので、本稿で補う。
- (41) 同上。
- (42) 同上。
- (43) 同上。
- (44) 汪二〇四aの「二、反切改良」による。但し、「切上字不带韻尾」を「陰聲韻」に變更した。
- (45) 「獨自に附さざるを得なかった」という表現はやや誤解を生む可能性があるのので注記するが、より正確に言えば「莊子音義」の當該箇處にその文字(ないしはそれに該當する音注)が見あたらないために、陳景元がおそらく他の韻書等から採用して附す必要があった」という意味である。
- (46) E1・E2・E4・E6・E7が該當する。
- (47) E3が該當する。『廣韻』入聲質韻の「匹」の義注に「俗作疋」とする。
- (48) 中古音は具體的には『廣韻』に代表される音系をさす。以下同。
- (49) 中古音における韻・聲母を示す。以下同。
- (50) 但し、幫母字の「布交切」は見える。

(51) 音の相違だけでなく、被注字の意味のとらえ方と相違も含まれる。ただし、単に音の相違による變更なのか、音と意味の相違による變更なのか判別しがたい例もある。このような場合も、『南華音義』の反切(時には直音注の含む)と『莊子音義』の表す音が、中古音においては互いに異なっているので、反切用字の變更と考え、對象から外した。

(52) 『莊子音義』では郭注として「許賜反」も収めるが、「賜」字は『廣韻』『集韻』ともに収められない。比較できないため、外した。

(53) 「洫」は『廣韻』入聲職韻に収められ、質韻にはない。これに該当する音は『廣韻』入聲質韻に収められる「逸 夷 質切」である。

(54) 「獮」は『廣韻』では平聲先韻と上聲軫韻のみにあり、去聲線韻には収められない。

(55) 『廣韻』では上聲賄韻には「崔」字は収められず、「崔 子罪切」は収められる。

(56) 『廣韻』では去聲遇韻には「句 九遇切」(遇韻見母)しか収められず、羣母の「句」は見あたらぬ。

(57) 『廣韻』去聲「遇」韻には「乳」字は収められないが、該当する反切「而遇切」は収められる。

(58) 『莊子音義』では「洫」字の音注は、直音音注だけでなく郭・李の二反切も併記するため、念のために二つとも比較しておく。

(59) 前掲注でも述べたことがあるが(注53参照)「洫」は『廣韻』では入聲職韻に見え、錫韻には収められない。

(60) 「宣轉」「息戀」の二切示されるが、前者は『莊子音義』と全同であるので、後者のみを検討する。

(61) 『毛詩音義』中「小雅 鹿鳴之什 四牡」など『經典釋文』に數箇處「栩 況甫反」が収められる。

(62) L3にも「軋」があるが、『莊子音義』の反切が異なるため、重複とは見なししていない。

(63) 『大廣益會玉篇』第卷十八車部二百八十二に「軋 於黠切」が見える。

(64) 『春秋左氏音義』など『經典釋文』に數箇處「語 魚據反」が収められる。

(65) 『禮記音義』「禮器十 禮器一」に「桎 之石反」が収められる。また『廣韻』『集韻』にも歸字は異なるが、「之

石切」が見える。

(66) 『大廣益會玉篇』第卷三女部三十五に「嫗 烏遇切」が收められる。

(67) 汪二〇〇四aは「啖 徒濫切」と「罷 斑稟切」を除外する。

(68) 各文字の前に附した番號は汪二〇〇四aの番號を踏襲する。以下同じ。

(69) 汪二〇〇四aでは「54乗 補永切」を陳景元独自の反切としている。これはおそらく汪氏が述古堂影印宋鈔本『集韻』(いま一九八五年上海古籍出版社影印本による)を底本とされたからであろう。この版本では乗字の反切上字が缺損しており、確認できないが、『宋刻集韻』(一九八八年中華書局影印本による)を調べてみると「乗 補永切」となっており、『上清音義』と同じであると確認できる。したがって、本稿では「54乗 補永切」を『集韻』と同じ反切とみなし、除外した(『廣韻』では「兵永切」)。

(70) 汪二〇〇四aの表一・二・三による。

(71) 前章でも觸れたが、陳景元は『莊子音義』については『經典釋文』を目睹したことは確實である。『經典釋文』と同一の反切五例(56「颺 必遙切」、61「要 一遙切」、65「少 失召切」、66「解 胡買切」、72「重 直龍切」)をも除外すれば、十七例ということになるが、『上清音義』では陸德明および『經典釋文』については一切言及されていないので、ここでは除外しない。

(72) 本稿では反切改良の条件として『南華音義』同様「切下字不帶聲母(下字零)」を付加する。

(73) 『大廣益會玉篇』第卷十六佉部二百四十三に「罐 古段切」が收められる。

(74) 『大廣益會玉篇』第卷十四跗部百六十四に「莽 莫黨切」が見える。

(75) 『大廣益會玉篇』第卷六手部六十六に「摩 呼爲切」が見える。

(76) 『集韻』に「颺」字を収めない。ここでは異體字「颺」の反切を掲げる。

(77) 汪二〇〇四aでは宋代に麻二・三等の區別は無かったとしている。

(78) 汪二〇〇四aはこの項目に「十」を入れていないが、本稿で訂正した。

(79) 『大廣益會玉篇』第卷十九水部二百八十五に「汨 古沒切」あり。  
(80) 汪二〇〇四aには「十」を入れていないが、本稿で訂正した。